僕は君と幽美に微笑みたい。～だから今日も、僕は半径1メートルの世界で君と向かい合う～

リュオン

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ーーー君と僕は、半径1メートルの世界で生きている。

とある中学校には、こんな噂が存在する。

ーーーー東校舎二階、その教室の1つの窓際の、とある机ーーーー

その机に関わった者は、呪われるーーーと。

その机には、〝透き通った女性の地縛霊〟がいると言う。

ーーーーそんな彼女を、僕は見ている。

半径1メートルのその空間に居る君は、きっと笑うととても美しいのだろう。勿論、今でも十分美しいけど。

僕は、君と笑いたい。それが、〝1つの存在に恋をした人間〟の、諚だから。

ーーーだから僕は、今日も君と向かい合う。

ーーーー孤独で美しい君の、拠り所の1つになれる様に。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

はい、まあいつも通り新シリーズです。

だがしかし今回はいつもとは違う！いつもは新しいネタ思いついて我慢出来ずに更新し始めて、結果前シリーズが更新停止するのがテンプレだったが！

…いやまあ、今回もテンプレになぞらえてるんだけどね……ただ、一応今回、かなり短いシリーズになります。

まあ既にオチまで考えてるからね、毎日投稿したら1週間ぐらいで終わると思うので、現在更新中のシリーズの更新が止まる事は、多分無いです。多分。

因みに、ラブコメよりは純愛寄りになります。ヒロインは萌え的な可愛さが出る様目指しますが、オチとかその他諸々はラブコメじゃ無いです。悪しからず。

最後に、ブクマや評価、感想レビューなどいただけると、ほんっとに励みになります！ちょっとした人助けだと思って、ポチっていただけると幸いです！

なお、こちらの作品は小説家になろう様にも投稿しています。

では。

目次

第1話　向かい合って笑いたい ―――― 1

第1話　向かい合って笑いたい

ーーー僕の所属するクラスには、とある机が存在する。

ーーーその机は、クラスメイト、いや、学園の生徒全てと言っても過言では無いだろう人々が、こう呼んでいる。

ーーー呪いの机、とーーー

その机には、とある1人の女性が、いつも肘をついて座っている。

授業中、休み時間、放課後。

そんな学校生活の全ての時間を、彼女は肘をついて、窓の外をぼんやりと眺めるーーーそんな行為に費やしている。

彼女は、美しい。

何処か吹雪を思わせる、腰の辺りまで伸びた真っ白な透き通った髪。

すべすべとした、見る者に陶器をイメージさせる、綺麗な透き通った肌。

座っている状態からでもゆうに分かる、調和の取れた、その場所に存在するだけで空間に馴染みつつ、果てし無い存在感を発する透き通った身体。

白と黒、その2つが反発しつつも共存し合う、ガラスの様な透き通った瞳。

そして、聞いた者に流水を考えさせる、流れる様な透き通った声。

全てに置いて完璧と言っても良い程の容姿を持った彼女は、だがそれでも、僕以外の人の眼を惹く事無く、そこに存在する。

何故なのか、一ヶ月程前に中学二年生に昇級し、新たなクラスでの生活をスタートさせた僕は、直ぐにそう考えた。

即ち、何故これ程までに美しくーーー人の心臓の鼓動を速める程の魅力を持った彼女が、何故誰とも関わる事無く1日を過ごして居るのか。

その答も、また直ぐにやって来た。

ーーーーー俗に、僕の所属する学園には、〝関わってはいけない領域〟がある。

ーーーーー俗に、〝学校の七不思議〟と呼ばれるソレは、関わった者に不幸と呪いを与えると。

ーーーーその内6つ、ソレは、僕も知っていた。

云く、西校舎3階の女子トイレ、その奥から三番目の個室を三回ノックする事で現れる、おかっぱの少女の噂。

云く、音楽室に飾られた絵画の一枚、ベートーヴェンの瞳が、こちらを見つめると言う噂。

云く、云く、云くーーー

ソレらの人の業によって生まれた〝噂〟は、人の口から耳、そして口から伝わって行く。

ーーーーいつしか、ソレらの〝云く〟は、僕の耳にも入ってくる。

ーーーだが、僕の耳に入って来たのは6つだ。つまり、〝1つ足りない〟

ーーーーその、最後の1つ。数少ない僕の友人に聞いた所、どうやら知らない僕の方が異常だった様だ。

ーーーーーーその、〝見られない彼女〟

ーーーーーーー彼女もまた、触れてはならない〝七不思議〟の1つ。

ーーーーーーーー『呪いの机に向かう、透き通った地縛霊』の噂。

ーーーーーーーー誰にも見られる事無く、人に何ら害を成す事無く、だがその存在を怪しまれ、また不気味がられる不憫な存在ーーーーーーーーソレが、彼女と言う人間(幽霊)の正体だ。

ーーーーー僕は、その存在に恋をした。

いつも誰とも馴れ合う事無く、ただ自身のペースを貫く少女に。

誰からも誰よりも不気味がられ、だがそれを気にする事無くただそこに居る彼女に。

自身の存在出来るテリトリー、〝呪いの机に向かう、半径1メートルのその空間で、誰よりも孤独に、誰よりも美しく存在する〟、そんな〝幽霊〟に。

ーーーだから僕は、今日も彼女に微笑みかける。

孤独な彼女の、1つの拠り所に、なれる様に。

未だ一度足りとも見た事の無い、だが明確に想像出来る、きっと美しいのであろう微笑みを、一度と言わずこの目に焼き付ける為に。

ーーーーだから僕は、今日も半径1メートルのこの空間で、彼女に話しかける。

ーーーーーー「おはよ、優美（ゆみ）さん」

ーーーーーー「あなたは、何故いつも私に話しかけてくるのですか。」

ーーーーー未だ相容れられない、一ヶ月の君と僕の関係。